

坂本城と置塩城―姫路を代表する赤松氏の遺跡―

大谷輝彦

はじめに

鎌倉時代末期から室町時代、そして戦国時代に至るまで、歴史の表舞台に何度も登場してきた赤松氏。その足跡は、姫路市内にも色濃く残されており、その代表となる二つの遺跡がある。一つは、平地居館である書写の坂本城、もう一つは、嘉吉の乱後に再興した後期赤松氏の拠点、播磨最大級の山城である置塩城（おじおじょう）である。

ここでは、この主要な遺跡を中心に、これまでどのように見いだされ、保存され、発掘調査をはじめとする調査研究がなされてきたのか、また、遺跡を生かした活用がについても、そのあらましを紹介していきたい。

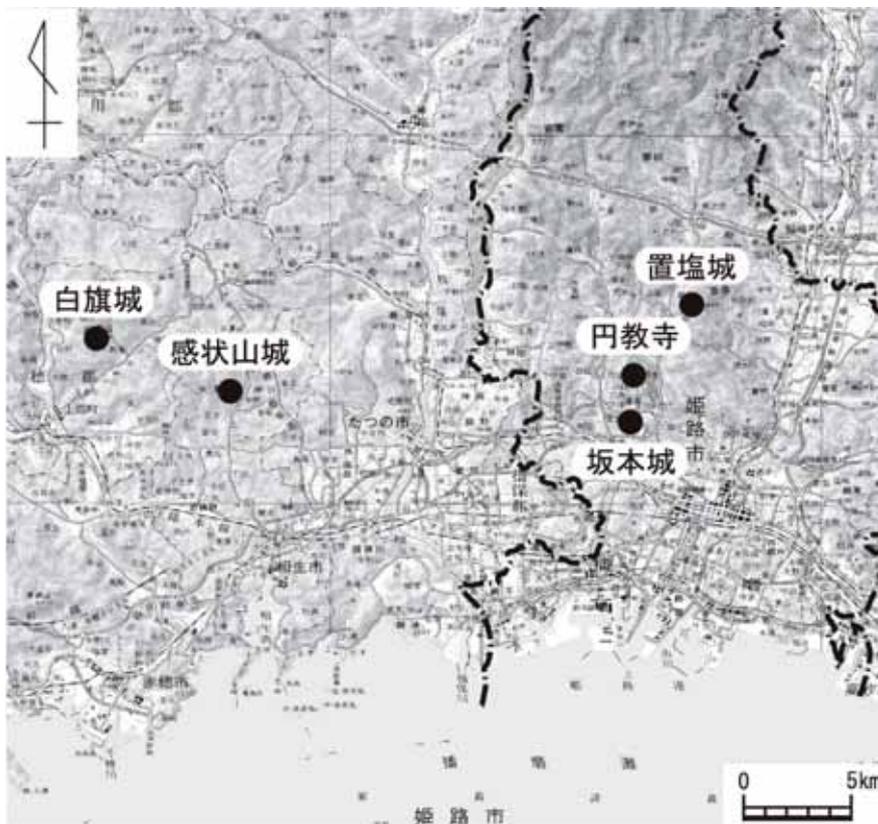


図1 坂本城・置塩城跡等の位置

一、坂本城

姫路市の中心部から北西に約8km、書写山円教寺は天台宗別格本山として、「西の比叡山」とも称される古刹である。十世紀後半の性空上人開創以来、広く尊崇されてきた。中でも、著名なものとしてあげられるのは、元弘三年（一一三三）五月、後醍醐天皇の行幸である。伯耆を発つた後醍醐天皇は、帰京の途中、たつの市の千本宿から齋崎宿を経て、山上へ参詣している。

この円教寺南麓に位置する坂本は、円教寺の門前集落であり、また、美作・因幡・伯耆方面へ通じる古くからの交通の拠点でもあった。南北朝時代には、新田義貞や足利尊氏等が、ここに陣を構えているなど、軍事拠点ともされていた。円教寺の主要な参道の一つ、西坂は坂本から北に延びており、後醍醐天皇の行幸もこのルートであった。坂本城は、赤松氏の播磨支配の拠点の一つとして、この地に整備された。築城年代は、明確ではないものの、十五世紀初頭には守護の命令が坂本から出されるなどしており、この頃には既に城が

あったと考えられる。嘉吉の乱では、赤松満祐が一時、坂本を本拠とし、応仁の乱では、山名方との激しい播磨争奪戦の舞台ともなった。その後、置塩に本拠が移るとともに、十六世紀初頭に廃城となったものと思われる。

城の具体的な所在は、長らく不明であったが、増田重信氏の精緻な研究により、小字「構江」に比定された。一九八一年、城跡の中央を東西に走る市道新設が計画され、工事に先立ち、初めての発掘調査が行われた。その後、道路周辺での各種開発工事に伴い、合計二二次にわたる調査が行われてきた。その結果、城は、南西部が西に張出したやや歪な方形の平面をとり、土塁と水堀で囲まれ、東側の堀は二重になっていた。規模は、東西・南北ともに約一七〇m、堀は、西が幅約二五m、深さ約三m、東は内側が幅一〇～一二m、深さ二m以上、外側が幅約五m、深さ一・八mで堀底に障壁を設けていた。東側の二重堀は、同時期に機能していたものかは不明である。土塁は、南西の張出し部を中心に良好に残っており、高さは、城外側で三～四m、城内側が二～三mである。本来

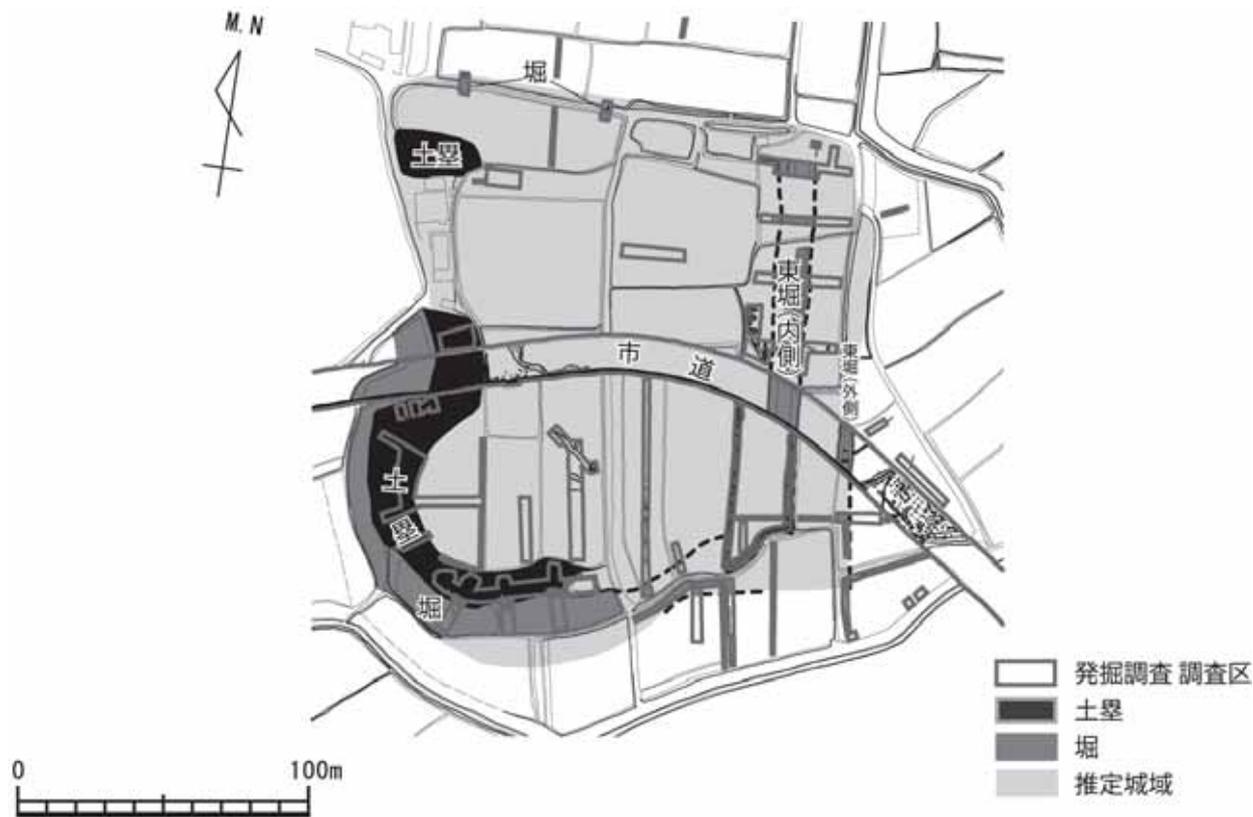


図2 坂本城跡の発掘調査

は、全周に巡らされていたものであろう。
 城跡は、近世初頭には、「かまへ池」と呼ばれるため池として利用が始まっていたと考えられる。それもあってか、土壘内で見つかった遺構は、二基の井戸や溝などわずかで、建物の痕跡は無かった。遺物も一五世紀後半から一六世紀初頭の土師器皿などで、量も限られる。

このように、坂本城は、その大半を開発工事等で失ったものの、土壘と堀のわずかな部分ではあるが、平成一四年に姫路市指定史跡となっている。現地には、説明板等が設置され、これを活用した史跡見学会なども開催されている。



二、置塩城

坂本城跡の北方約六・五km、夢前川東岸に張出した標高約三七〇mの城山に位置する。山頂からは、南北に視界が開け、南側がより良好な眺望であり、市の中心部はもとより播磨灘、淡路島から四国山地までも見渡すことができる。

置塩城の築城は、文明元年（一四六九）、応仁・文明の乱で播磨守護に復権した赤松政則によるものと言われてきた。政則は、嘉吉の乱で滅亡した赤松満祐の弟である義雅の孫にあたる。その後、赤松惣領家は、義村、政村、晴政、義祐、則房と代替わりしていく。近年の研究成果によれば、一六世紀初め頃、義村の代に坂本から置塩に拠点が移動、次の晴政の代に山城の整備が行われ、その時期は一六世紀中頃と考えられるようになった。その後、羽柴秀吉の播磨平定により、天正八年（一五八〇）に城破りが触れだされて廃城となり、程なく則房は阿波へ移封された。

山城の曲輪は、東西二つの峰がある山頂部に広がっている。規模は、東西約六〇〇m、南北約四

〇〇mにわたり、大小七〇段のからなっており、大きく七つの群に分けられる。最高所となる東側の峰には、曲輪群（伝本丸跡）があり、ここより約二〇m程低くなる西側の峰には、曲輪群（伝二の丸跡）を中心に屋敷地の曲輪群が集中している。

曲輪群では、曲輪の中心に塙と呼ばれる反りのない瓦を基礎に張り付けた建物がみつかっている。蔵のような構造と思われるが、最高所にあることから、天守のような象徴的なものであったと考えられている。南西部には、櫓建物もあるなど、嚴重に守られており、城の最終防衛拠点としての機能が考えられる。曲輪群は城の中央に位置している。全体の七割近くを占める、大規模な礎石建物があり、御殿に相当すると考えられている。この南側には、立石を伴う庭と考えられる遺構も見つかっている。各々の曲輪の防御は、高い切岸を主として、石垣も約五〇箇所で見られるなど、織豊系城郭の石垣とは異なる在地的な技法によるものとして、置塩城を特徴づけている。

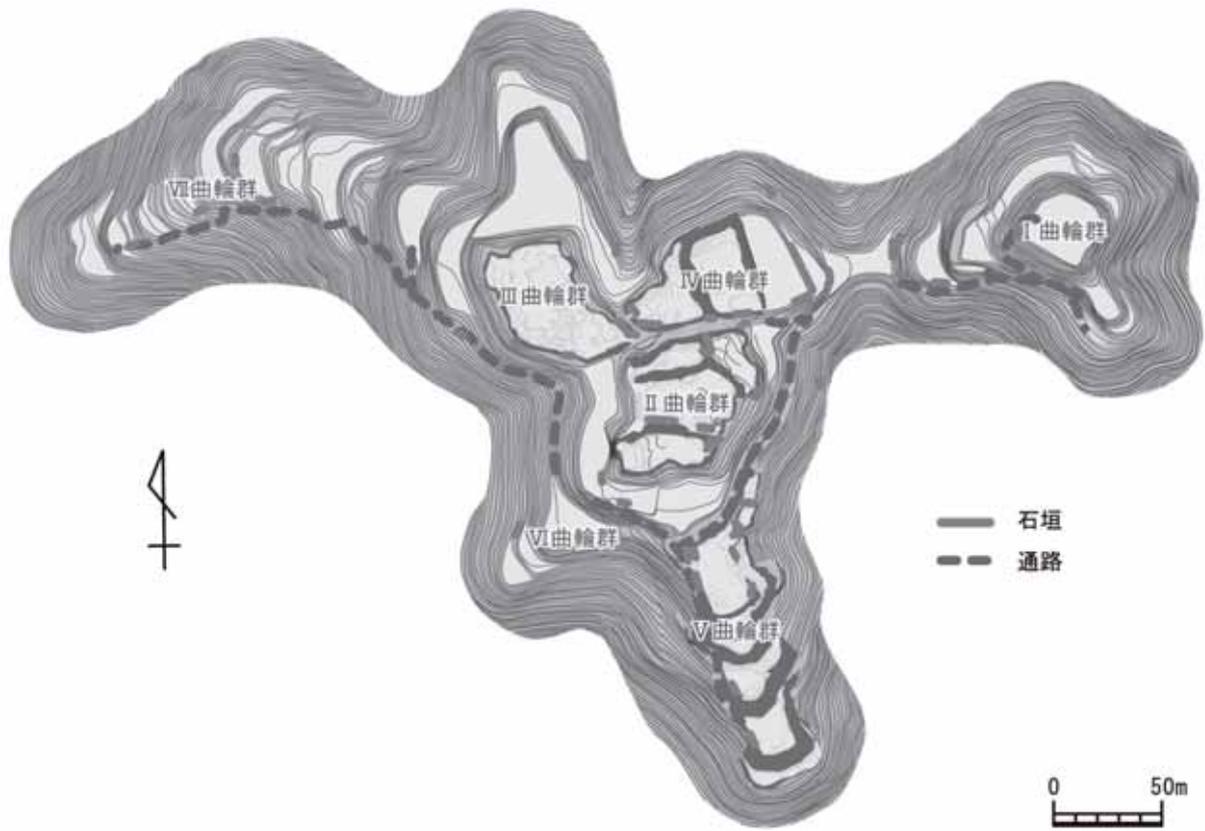


図3 置塩城の曲輪

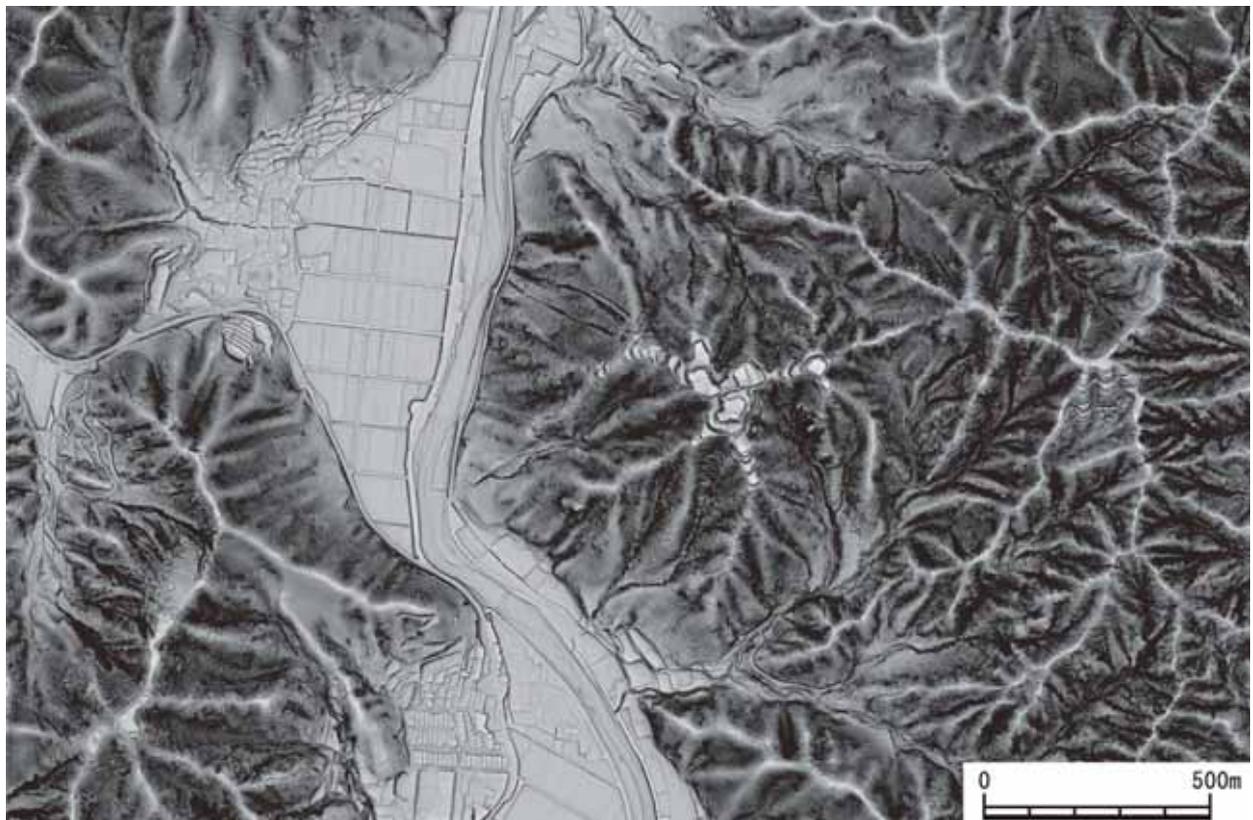


図4 置塩城の三次元測量図（赤色立体図）

置塩城が城跡として知られるようになったのは、一九六〇年代と比較的早く、昭和五四年刊行の夢前町史、昭和五八年、夢前町が学術的な調査を開始するなどより広く知られるようになっていった。平成五年、夢前町指定史跡となり、翌年からは、有識者による置塩城跡調査研究委員会が設置され、平成七年に成果をまとめた報告書が刊行された。平成九年、兵庫県指定史跡、平成一〇年には、赤松氏城跡として平成八年に先に指定されていた、上郡町の白旗城跡、相生市の感状山城跡に追加される形で国指定史跡となった。

夢前町では、置塩城跡周辺を「城山文化交流拠点」と位置づけ、その中核として、置塩城跡の調査研究を加速させていく。平成一三年度から四年度間をかけ、城内全域の学術調査を行い、その成果報告を最終年度に刊行した。平成一八年の姫路市との合併後も史跡の保存活用のための計画策定、三次元による詳細測量などにより、城跡の調査研究を更に進めた。

城跡をより身近に感じてもらう取り組みとして、地元との協働による登山道の補修、看板の改修や

新設などを進めてきた。また、地元の小中学生への現地での出前授業や市民を対象とした史跡見学会なども実施している。地元主催の行事として、毎年置塩城南の山麓で開催される「置塩城まつり」があり、令和四年で二十七回を迎えた。武者行列や山上での見学など、多くの市民で賑わう恒例行事となっている。

